

芥子園刻『牡丹亭還魂記』考略

根ヶ山 徹

一
明代屈指の才子佳人劇『牡丹亭還魂記』は、万曆二十六年（一五九八）に一応の完成を見て以降、明代にとどまらず清代においても数多くの版本が出版された。代表的な清版は以下のとおりである。

『吳興山三婦合評牡丹亭還魂記』 上下巻。康熙三十三年（一六六四）夢園藏板。

『才子牡丹亭』 不分巻。康熙雍正間笠閣漁翁刻本。

『牡丹亭還魂記』 八巻。清刻袖珍本。

『牡丹亭還魂記』 八巻。雍正間芥子園刻本。

『牡丹亭還魂記』 八巻。乾隆間怡府刻本。

『玉茗堂還魂記』 上下巻。乾隆五十年（一七八五）永糸館増図重梓本。

このうち、芥子園刻『牡丹亭還魂記』八巻には複数の版本が現存する。

本稿は、筑波大学、大阪大学および東北大学の各附属図書館に架

蔵される芥子園刻本について、清版『牡丹亭還魂記』における位置づけ、出版の先後、同一系統に属する版本との関係について明らかにしようとするものである。

二

筑波大学附属図書館蔵本は、封面を「玉茗堂原本／繡像牡丹亭／芥子園發兌」に作り、巻首に「万曆戊子秋月、臨川清遠道人湯顯祖題」の署名を有する「『牡丹亭』題辭」を置き、単面式の挿図四葉を配す。挿図の裏面には、以下の本文曲辭の秀句が刻される。

「雨蹟雲踪纔一轉、敢依花傍柳還重見。」（尋夢）齣（第十二齣）【月上海棠】

「轉過這芍葉闌前、緊靠着湖山石辺。」（驚夢）齣（第十齣）【山桃紅】

「這顔色不似扞泉台。」（冥判）齣（第二十三齣）【那叱令】

「牡丹亭夢影双描画。」（円駕）齣（第五十五齣）【北尾】

目録題は「牡丹亭還魂記目録」、本文首行の書名は「牡丹亭還魂記」

に作り、次行には「臨川湯頭祖編」とある。半葉八行十六字、四周単辺、白口、単魚尾。序の版心は「序」「魚尾」「葉数」、目録の版心は「還魂記」「魚尾」巻〇 目録 葉数」、挿図の版心は「還魂記」「魚尾」葉数 芥子園」、本文の版心は「還魂記」「魚尾」巻〇 葉数」である。

大阪大学附属図書館蔵本、東北大学附属図書館蔵本の封面、序、挿図、目録題、本文首行の書名、本文次行の署名、行格、版框、辺欄は、刻字、挿図の巧拙に差異がある以外、筑波大学本と同一である。大阪大学本には「懷徳堂／図書記」、「碩園記念文庫」の印があり、西村天囚（一八六五―一九二四）の旧蔵書である。東北大学本には「田岡嶺雲遺書／田岡良一氏寄贈」の印があり、田岡嶺雲（一八七〇―一九二二）の旧蔵書である。

大阪大学・東北大学本には以下の錯簡が見られる。

「如杭」齣（第三十九齣）は、巻六第三十六葉裏面から始まる。第三十八葉は【小措大】曲の第七句目「聴六街裡喧伝人氣槩」の「聴六街裡喧」までで、続く「伝人氣槩」は第四十葉から始まる。第三十九葉には、「索元」齣（第五十二齣）の【香柳娘】曲に続く賓白「状元在你家」から「丑作拿浄介」俺們叫柳夢」までが混入している。

「索元」齣（第五十二齣）は、巻八第二十六葉から始まる。第二十八葉は【香柳娘】曲に続く賓白「老旦・丑上」王大姐喜哩。柳状元在你家。」の「王大姐喜哩。即（即）は「柳」の誤刻）」までで、続く「状元在你家」から「丑作拿浄介」俺們叫柳夢」までは、上述の巻六

第三十九葉（「如杭」齣の途中）に混入し、続く「梅、你也叫柳夢梅。」から同齣末尾までは巻八第三十葉に配される。巻八第二十九葉には、「円駕」齣（第五十五齣）【北刮地風】末尾の「有甚麼饒不過這嬌滴滴的女孩子家」の「滴的女孩子家」から賓白「末」状元、聴俺分劬一言。」までが混入している。

なお、「索元」齣に混入していた【北刮地風】末尾の「有甚麼饒不過這嬌滴滴的女孩子家」の「滴的女孩子家」から「末」状元、聴俺分劬一言。」までは、「円駕」齣（第五十五齣）の巻八第五十九葉の本来的場所にも配されている。版心の葉数表示は、それぞれ「二十九」、「五十九」と刻し、刻字も異なる。

東北大学本の巻四第三十四葉、「圪真」齣（第二十六齣）の末尾【族御林】曲に続く賓白「早晚玩之」から同齣末尾までは欠葉である。

三

清版『牡丹亭還魂記』は、明代に通行した版本とは曲辞、賓白に異同が見られる。その嚆矢は呉具山（名儀一、又名具人、字璩符、又字舒冕、錢塘の人。居所にちなんで具山と号した。一六四七―？）の三人の妻である陳同（？一六六五）、談則（？一六七五）、錢宜（一六七一―？）の手に成る『牡丹亭還魂記』の評点本『具具山三婦合評牡丹亭還魂記』（以下、三婦合評本と略称）上下巻である。初版は康熙三十三年（一六九四）、夢園より刊刻された。三婦合評本における本文の改変が、清代にお

ける『牡丹亭還魂記』の曲辭、賓白の指標となつたことは夙に指摘したとおりである。¹⁾以下に、明版²⁾、三婦合評本³⁾および芥子園刻本の関係について明らかにしておきたい。

第一齣「標目」において、末(説明役)の下場詩の第一句目には、次のような異同が見られる。

明版	杜麗娘夢写丹青記。
三婦合評本	杜小姐夢写丹青記。
芥子園刻本	杜小姐夢写丹青記。

明版では「杜麗娘 夢に丹青記を写す」に作るが、三婦合評本において「杜麗娘」は「杜小姐」に改変され、芥子園刻本もこれを継承する。

第六齣「悵眺」において、丑(韓子才)が身世を述べる賓白には、次のような異同が見られる。

明版	果然後來退之公公潮州瘴死、挙目無親。
三婦合評本	後來退之公公果然瘴死潮州。
芥子園刻本	後來退之公公果然瘴死潮州。

明版では「果たして後に退之公が潮州で病死された際に、周りに肉親はおりませんでした。」に作るが、三婦合評本において「後に退之公は果たして潮州で病死されました。」に簡略化され、芥子園刻本もこれを継承する。

第十四齣「写真」において、旦(杜麗娘)が自画像に題した詩の一句目、四句目には、次のような異同が見られる。

明版	近親分明似儼然、遠親自在若飛仙。他年得傍蟾宮客、不在梅邊在柳辺。
三婦合評本	近親分明似儼然、遠親自在若飛仙。他年得傍蟾宮客、不是梅邊是柳辺。
芥子園刻本	近親分明似儼然、遠親自在若飛仙。他年得傍蟾宮客、不是梅邊是柳辺。

一句目は明版、三婦合評本では「親」に作るが、芥子園刻本では「親」に改変する。また四句目は明版では「在」に作るが、三婦合評本において「是」に改変し、芥子園刻本もこれを継承する。

第二十齣「鬧癡」において、杜麗娘の夭折を悲しむ両親を思い遣る貼(春香)の賓白には、次のような異同が見られる。

明版	我小姐一病傷春死了也、痛殺了我家爺、我家奶奶。
三婦合評本	我小姐一病傷春竟死了也。
芥子園刻本	我小姐一病傷春竟死了也。

明版では「お嬢さまは去りゆく春に心を傷めてお亡くなりになりましたが、旦那さまも、奥方さまもお痛ましいかぎりです。」に作るが、三婦合評本において「お嬢さまは去りゆく春に心を傷めてとうとうお亡くなりになりました。」に改変され、芥子園刻本もこれを継承する。

第二十三齣「冥判」において、浄(判官)が末(花神)に向かって杜麗娘の処遇について考えを述べる賓白には、次のような異同が見

られる。

明版	這女囚慕色而亡、也眨在鶯燕隊裏去罷。
三婦合評本	這女鬼・慕色而亡、也眨在鶯燕隊裡去罷。
芥子園刻本	這女鬼・慕色而亡、也眨在鶯燕隊裡去罷。

明版では「この女の囚人は色を慕って死んだのだから、鶯燕隊に眨しめることとする。」に作るが、三婦合評本において「女囚」（女の囚人）は「女鬼」（女の亡霊）に改変され、芥子園刻本も継承する。

第四十七齣「困釈」において、淮城の包圍を解いた丑（楊氏）の海上偵察の命に衆（部下）が応じる賓白には、次のような異同が見られる。

明版	船隻齊備了。（内鼓介）稟大王起行。
三婦合評本	船隻齊備。請大王、娘・娘起行。
芥子園刻本	船隻齊備。請大王、娘・娘起行。

明版では「船の準備が整いました。（内で太鼓の音）大王さまにはご出発ください。」に作るが、三婦合評本において「船の準備が整いました。大王さま、お妃さまにはご出発ください。」に改変され、芥子園刻本もこれを継承する。

この他、各齣の齣数を表示せず、集唐詩、下場詩の脚色は明示しないかわりに原作者名を明示する点も、三婦合評本に同一である。

このように、芥子園刻本は三婦合評本の系譜に位置づけられるが、筑波大学本と、大阪大学・東北大学本の間には異同が見られる。

第九齣「肅苑」において、末（陳最良）が登場して自らの身世を

唱う【前腔（二江風）】冒頭の曲辞には、筑波大学本と大阪大学・東北大学本の間には次のような異同が見られる。

筑波大学本	老書堂、暫借扶風帳。
大阪大学・東北大学本	老書堂、暫借扶風帳。

筑波大学本では「古びた学堂を、しばし借りて学問を教える。」に作るが、大阪大学・東北大学本では「老書堂」を「老書当」に誤る。

第十九齣「牝賊」において、武具を身に着けているので李全に挨拶をせぬ非礼をわびる丑（楊氏）の賓白には、筑波大学本と大阪大学・東北大学本の間には次のような異同が見られる。

筑波大学本	大王千歳。奴家介胄在身、不拜了。
大阪大学・東北大学本	大王千歳。参甲胄在身、不拜了。

筑波大学本は「大王万歳。わらわは甲胄を身に着けておりますので、ご挨拶は失礼させていただきます。」に作るが、大阪大学・東北大学本では「奴家」を「参甲」に、「介胄」を「胄胄」に誤る。

第三十一齣「繕備」において、江淮を騷擾する李全の軍隊を防備するために体制を整える外（杜宝）が唱う【尾声】の曲辞には、筑波大学本と大阪大学・東北大学本の間には次のような異同が見られる。

筑波大学本	按三韜把六出旂門放、文和武肅靜端詳。
大阪大学・東北大学本	按三鞋花六出旂門放、文和武肅靜端詳。

筑波大学本は「『三略』『六韜』に基づいて軍營の門を六箇所配置す

る、文武官、心を落ち着けて詳らかに看よ。」に作るが、大阪大学・東北大学本では「三韜」を「三鞋」に、「把」を「花」に誤る。

第三十七齣「駭変」において、末（陳最良）が杜麗娘の墓が発かされたことに気付き、柳夢梅を罵倒して唱う【尾声】の曲辞には、筑波大学本において三婦合評本に手が加えられ、更に大阪大学・東北大学本の間にも次のような異同が見られる。

三婦合評本	柳夢梅、他做得個破周書汲冢才。
筑波大学本	他做得個坡周書汲冢才。
大阪大学・東北大学本	他做得個坡周書汲冢才。

三婦合評本では「柳夢梅、破れた周書を汲冢より手に入れる才を持つ。」に作る。芥子園刻本はいずれも「柳夢梅」を省略し、筑波大学本は「破周書」を「坡周書」に誤り、大阪大学・東北大学本では更に「汲冢」を「汲家」に誤る。

第四十二齣「移鎮」において、淮安の鎮台を移すことになった外（杜宝）が長江の風景を賞でて唱う【長拍】の曲辞は、三婦合評本、筑波大学本と大阪大学・東北大学本の間にも次のような異同が見られる。

三婦合評本	風定也、落日搖帆映綠蒲、白雲秋 窄的鳴簫鼓。
筑波大学本	風定也、落日播帆映綠蒲、白雲秋 窄的鳴簫鼓。
大阪大学・東北大学本	風定也、落日播帆映綠蒲、白雲秋 窄的鳴簫鼓。

三婦合評本では「風定まれば、落日 搖帆 緑蒲に映じ、白雲 秋 窄しく簫鼓を鳴らす。」に作る。筑波大学本は「搖帆」を「播帆」に誤り、大阪大学・東北大学本では更に「播帆」に誤る。

第五十齣「聞宴」において、戦勝の太平宴に闖入し、娘婿として認められようと詩稿を練る生（柳夢梅）の賓白には、筑波大学本と大阪大学・東北大学本の間にも次のような異同が見られる。

筑波大学本	且在這班房裡蹬着、打想一篇、正是「有備无患。」
大阪大学・東北大学本	且在這班房裡蹬着、打想一篇、正是「有備元患。」

筑波大学本では「しばしこの脇部屋で待つて、一篇構想しよう、まさしく『備えあれば憂いなし』だ。」に作るが、大阪大学・東北大学本では「无」を「元」に誤る。

以上のように、筑波大学本に誤刻は無く、大阪大学・東北大学本に誤刻が見られるもの、筑波大学本に誤刻があり、大阪大学・東北大学本では誤刻が更に拡大している例も見られ、筑波大学本と大阪大学・東北大学本は別版であることが明らかである。とりわけ、誤刻が更に拡大していることからすれば、筑波大学本が先に上梓され、大阪大学・東北大学本は後印本と看做すことができる。

芥子園刻本と版式が酷似する八行十六字本の『牡丹亭還魂記』八卷は、中国国家図書館にも架蔵される（以下、清刻袖珍本と略称）。⁴

封面を欠き、「題辞」、「目録」、「挿図」、「本文」の順に配列され、目録題、本文首行の書名、本文次行の署名、行格、版框は芥子園刻本と同一であるが、本文の辺欄は左右双辺、序の版心は「序〔魚尾〕」、目録の版心は「〔魚尾〕還魂記目録 葉数」、挿図の版心は「〔魚尾〕還魂記 葉数」、本文の版心は「〔魚尾〕還魂記卷〇 葉数」に作り、序、目録、挿図は白口、本文は黒口である。「頭白／周郎」の印がある。以下に芥子園刻本との関係を明らかにしたい。

第三齣「訓女」において、外（杜宝）の自己紹介の賓白には、明版、三婦合評本、清刻袖珍本および芥子園刻本の間に次のような異同が見られる。

明版	乃唐朝杜子美之後、流落巴蜀、年過五旬。
三婦合評本	乃唐朝工部杜子美之後、流落巴蜀、年過五旬。
清刻袖珍本	迺唐朝工部杜子美之後、流落巴蜀、年過五旬。
芥子園刻本	迺唐朝工部杜子美之後、流落巴蜀、年過五旬。

清刻袖珍本も芥子園刻本も「すなわち唐朝で工部員外郎を務めた杜子美の子孫で、巴蜀の地にさすらい、年も五十を過ぎた。」に作り、同一である。「乃」を「迺」に改める他は、三婦合評本を継承したものである。ちなみに明版では「工部」は無い。

第五齣「延師」において、外（杜宝）が妻甄氏と相談し、老儒者を招いて娘の家庭教師にしたいという賓白には、明版、三婦合評本、清刻袖珍本および芥子園刻本の間に次のような異同が見られる。

明版	我杜宝、出守此間、只有夫人一女、尋箇老儒教訓他。
三婦合評本	我杜宝與夫人商議、要尋箇老儒教訓女孩兒。
清刻袖珍本	我杜宝与夫人商議、尋個老儒教訓他。
芥子園刻本	我杜宝与夫人商議、尋個老儒教訓他。

明版では「それがし杜宝は、遣わされてこの地の太守を務めており、妻と一人娘がおる。老儒者を探して彼女の教育をさせることとした。」に作る。三婦合評本では、「それがし杜宝は奥と相談し、老儒者を探して娘の教育をさせたいものじゃ。」に作り、家庭教師を招くのは、妻と相談のうえであるとし、「要」を加えて願望を表し、明版の人称代詞「他」は「女孩兒」に改められる。清刻袖珍本、芥子園刻本では「要」は削除され、杜麗娘は「他」で表して、「それがし杜宝は奥と相談し、老儒者を探して娘の教育をさせることとした。」に作る。

第十四齣「写真」において、侍女の春香に瘦せたと言われた旦（杜麗娘）が鏡を見て、衰えを悲嘆する卜書きには、明版、三婦合評本、清刻袖珍本および芥子園刻本の間に次のような異同が見られる。

明版	〔照介、悲介〕哎也。俺往日豔冶輕盈、奈何一瘦至此。
----	---------------------------

三婦合評本	〔照鏡悲介〕 哎也。俺往日艶冶輕盈、奈何一瘦至此。
清刻袖珍本	〔照鏡悲介〕 哎也。俺往日艶冶輕盈、奈何一瘦至此。
芥子園刻本	〔照鏡悲介〕 哎也。俺往日艶冶輕盈、奈何一瘦至此。

「以前は妖艶でなやかであったのに、どうしてこんなにまで痩せてしまったのかしら。」という賓白を導くために、明版における「鏡に映すしぐさ、悲しむしぐさ」と二段階の身段は、三婦合評本、清刻袖珍本、芥子園刻本においては一律に「鏡に映して悲しむしぐさ」と連続した動作に改められる。

第十六齣「詰病」において、外（杜宝）が妻甄氏に娘の病氣の原因をたずねる賓白には、明版、三婦合評本、清刻袖珍本および芥子園刻本の間次のような異同が見られる。

明版	夫人、女兒病体因何。
三婦合評本	夫人、女兒病体若何。
清刻袖珍本	夫人、女兒病体若何。
芥子園刻本	夫人、女兒病体若何。

明版では「因何」に作って、「奥や、娘が病氣になったのはどうしてじゃ。」と原因を尋ねている。三婦合評本、清刻袖珍本、芥子園刻本では「若何」に作って、「奥や、娘の病氣はどうなのじゃ。」と状況を尋ねている。

第十八齣「診崇」において、甄氏の命をうけて禳解のため杜麗娘のもとを訪れた石道姑に、貼（春香）が来訪の理由を問う賓白には、明版、三婦合評本、清刻袖珍本および芥子園刻本の間次のような異同が見られる。

明版	姑姑為何而來。
三婦合評本	姑姑為何而至。
清刻袖珍本	姑姑為何而至。
芥子園刻本	姑姑為何而至。

「道姑さん、何のためにいらつしやいましたか。」は、明版では杜麗娘のもとに近づいたニュアンスを出すために「来」を用い、三婦合評本、清刻袖珍本、芥子園刻本では杜麗娘のもとに到達したニュアンスを出すために「至」を用いている。

第二十三齣「冥判」において、浄（判官）の審問を受けた旦（杜麗娘）の賓白には、明版、三婦合評本、清刻袖珍本および芥子園刻本の間次のような異同が見られる。

明版	女囚不曾過人家、也不會飲酒、是這般顏色。
三婦合評本	女鬼不曾過人家、也不會飲酒、是這般顏色。
清刻袖珍本	女鬼不曾過人家、也不會飲酒、是這般顏色。
芥子園刻本	女鬼不曾過人家、也不會飲酒、是這般顏色。

「嫁入りしたこともございませぬし、お酒を飲んだこともございませぬが、このような器量でございます。」と弁明する杜麗娘は、明版では「女囚」と自称し、三婦合評本、清刻袖珍本、芥子園刻本で

は「女鬼」と自称する。

第三十八齣「淮警」において、金に淮揚攻撃を命ぜられた淨(李全)が、楊氏と対応を協議しようとする賓白には、明版、三婦合評本、清刻袖珍本および芥子園刻本の間に次のような異同が見られる。

明版	打聽大金家兵糧湊集、將次南征、教俺淮揚開路、不免請出賤房計議。
三婦合評本	打聽大金家兵糧湊集、將次南征、教俺淮揚開路、不免請出娘・娘計議。
清刻袖珍本	打聽大金家兵糧湊集、將次南征、教俺淮揚開路、不免請出娘・娘計議。
芥子園刻本	打聽大金家兵糧湊集、將次南征、教俺淮揚開路、不免請出娘・娘計議。

明版では「聞くところによれば大金は兵士糧食を集め、まもなく南征をおこなおうとしており、それがしに淮揚で先駆けを命じられるとのこと、奥(賤房)を呼んで協議せねばなるまい。」に作る。三婦合評本、清刻袖珍本、芥子園刻本においては、「賤房」を「娘・娘」に作る。

ちなみに、明版においては、この部分は「賤房」と「箭坊」(箭職人)を双関語とした挿科打諢であり、三婦合評本の「或問」第七則には、この部分を削除した理由が述べられる。

あるひとがたずねた。「坊刻の『牡丹亭』本には、……『淮警』『禦准』の二折に、『箭坊』『鎖城』の二つの挿科打諢を演ずる場面

がある。しかしながら、どうしてこの本にだけ無いのか」と。答えて言う。「……『賤房』を『箭坊』としたり、『外では李全を鎖し、内では下官を鎖す』の諸語にいたっては、いずれもまったく意味がないので、削除すべきである。」

三婦合評本において挿科打諢削除にともない「賤房」は「娘・娘」に改められ、清刻袖珍本、芥子園刻本においても、これを継承しているのである。

第五十三齣「硬考」において、末(役人)が丑(獄官)に生(柳夢梅)を平章府に移送するよう命ずる賓白には、明版、三婦合評本、清刻袖珍本および芥子園刻本の間に次のような異同が見られる。

明版	拿狗官平章府去。
三婦合評本	拿他平章府去。
清刻袖珍本	拿他平章府去。
芥子園刻本	拿他平章府去。

「平章府に連行する」柳夢梅を、明版においては罵詞「狗官」で、三婦合評本、清刻袖珍本、芥子園刻本では人称代詞「他」で表す。以上の例から、清刻袖珍本と芥子園刻本は同一系統に属することが明らかである。更に言うならば、三婦合評本が先行し、清刻袖珍本、芥子園刻本は後発の版本である。

清刻袖珍本と芥子園刻本の間には異同が見られる。

第八齣「勸農」において、外(老人)が勸農に訪れた太守杜宝の治政を讃えて唱う【前腔(八声甘州)】の冒頭には、清刻袖珍本、筑

波大学本および大阪大学・東北大学本の間に次のような異同が見られる。

清刻袖珍本	千村転歳華、愚父老香盆、兒童竹馬。
筑波大学本	千村転歳華、愚父老香盆、兒童竹馬。
大阪大学・東北大学本	于村転歳華、愚父老香盆、兒童竹馬。

清刻袖珍本では「あの村この村 年ごとに楽しい日々、年寄り香炉をささげ、子供は竹馬にてお出迎え。」に作る。筑波大学本は「千」を「干」に誤り、大阪大学・東北大学本では更に「于」に誤っており、誤刻の系譜を看取できる。

第九齣「肅苑」において、貼（春香）が杜麗娘から花守に花園の道の掃除を命じておくよう言いつけられたという賓白には、清刻袖珍本、筑波大学本および大阪大学・東北大学本の間に次のような異同が見られる。

清刻袖珍本	預喚花郎、掃清花逕。
筑波大学本	預喚花郎、掃清花逕。
大阪大学・東北大学本	預喚花郎、歸清花逕。

清刻袖珍本では「花守を呼んで、お庭の道を掃除させておいてちょうだい。」に作る。筑波大学本は「掃」を「掃」に改め、大阪大学・東北大学本では「歸」に誤る。

第十齣「驚夢」において、末（花神）が登場する場面の賓白には、清刻袖珍本、筑波大学本および大阪大学・東北大学本の間に次のような異同が見られる。

清刻袖珍本	吾乃掌管南安府後花園花神是也。
筑波大学本	我乃掌管南安府后花園花神是也。
大阪大学・東北大学本	我乃云舒能安府后花園花神是也。

清刻袖珍本では「われこそは南安府の後花園をおさめる花神なるぞ。」に作る。筑波大学本は「吾」を「我」に、「後」を「后」に改め、大阪大学・東北大学本では「掌管南安府」を「云舒能安府」に誤る。第十六齣「詰病」において、貼（春香）が登場する際の口上には、清刻袖珍本、筑波大学本および大阪大学・東北大学本の間に次のような異同が見られる。

清刻袖珍本	我「眼裡不逢乖小使」、掌中擎着個病多姣。
筑波大学本	我「服裡不逢乖小使」、掌中擎着個病多姣。
大阪大学・東北大学本	我「服裡不逢乖小使」、掌中擎着個病多姣。

清刻袖珍本は「利口な書童にあわねども、掌中にささぐは病める美女。」に作る。筑波大学本は「眼」を「服」に誤り、大阪大学・東北大学本では更に「乖」を「乘」に誤る。

第二十三齣「冥判」において、浄（判官）が趙大・錢十五・孫心・李猴児の罪状を帳簿に記入するという卜書きには、清刻袖珍本、筑波大学本および大阪大学・東北大学本の間に次のような異同が見られる。

清刻袖珍本	做寫簿介。
筑波大学本	做寫簿介。
大阪大学・東北大学本	做鳥簿介。

清刻袖珍本は「帳簿に書き込むしぐさ」に作る。筑波大学本は「寫」を「寫」に誤り、大阪大学・東北大学本では更に「鳥」に誤る。

第五十二齣「索元」において、状元に合格した柳夢梅を探す軍校の来訪を受けた貼（瓦市の王大姐）が登場する際の集唐詩の冒頭二句には、三婦合評本、清刻袖珍本、筑波大学本および大阪大学・東北大学本の間のような異同が見られる。

三婦合評本	残鶯何事不知秋、日日悲看水独流。
清刻袖珍本	林鶯何事不知秋、日日悲看水独流。
筑波大学本	林鶯何事不知秋、日日悲看水独流。
大阪大学・東北大学本	林鶯何事不知秋、日日悲看水独流。

三婦合評本は「残鶯何事ぞ秋を知らず、日日悲しみて看る 水独り流るるを。」に作る。清刻袖珍本は「残」を「林」に改め、筑波大学は更に「鶯」を「鶯」に俗字化し、大阪大学・東北大学本では「鶯」に誤る。

第五十三齣「硬考」において、淮安府から護送されてきた柳夢梅が賄賂を何ひとつ持っていないことに立腹した浄（典獄）の賓白には、清刻袖珍本、筑波大学本および大阪大学・東北大学本の間のような異同が見られる。

清刻袖珍本	哎呀、一件也没有、大胆来举手。
-------	-----------------

筑波大学本	哎呀、一件也没有、大胆来举手。
大阪大学・東北大学本	哎呀、一件也没有、大胆来举手。

清刻袖珍本・筑波大学本は「なんと、何ひとつ持っていないのに、ずうずうしく手を挙げおつて。」に作る。大阪大学・東北大学本では「胆」を「朋」に誤る。

以上のように、清刻袖珍本・筑波大学本に誤刻は無く、大阪大学・東北大学本に誤刻が見られる例、清刻袖珍本に誤刻は無く、筑波大学本に誤刻が見られ、大阪大学・東北大学本では誤刻が更に拡大している例、清刻袖珍本・筑波大学本に同一の誤刻が見られ、大阪大学・東北大学本に至って誤刻が更に拡大している例が見られる。このことから、清刻袖珍本は筑波大学本に先行して上梓され、大阪大学・東北大学本は後れて出版されたことが明らかである。

五

明末清初の作家李漁（一六一一—一六八〇）は、戯曲『笠翁伝奇十種』、小説『無声戲』、『十二楼』、随筆『閑情偶寄』によって、広く知られている。書坊芥子園は、李漁が金陵に在住した康熙七年（一六六八）に開設された。しかしながら、「上都門故人述旧状書」（『笠翁文集』巻三）には、康熙十六年（一六七七）、借金返済のために杭州に移った際には、「金陵の出版業は他人に譲り、著作の版木や衣類、簪や珥、換金できるものは、すべて換金し、家族を連れて出た。」とい

うありさまであったと回顧する。『芥子園画伝初集』が出版されたのは李漁在世中の康熙十八年（二六七九）のことであったが、それから二十二年を経て、「康熙辛巳（四十年、一七〇二）歳中秋望日、湖邨王槩手題」の刊記を有する「画伝合編序」（『画伝二集』巻首）には、「早くも二十数年が過ぎ、翁はすでに亡くなり、芥子園は三たび主人が代わったが、この書物は元どおりに遠近を問わず買って買いらぬめられるありさまである。」⁷と云っている。芥子園は康熙十六年には他人に譲り、経営者は頻繁に交代し、李漁との関係は断ち切られていたことが明らかである。芥子園は、康熙年間にとどまらず、雍正、乾隆、嘉慶、道光、咸豊、同治年間においても活動を続けているが、その経営者の詳細については知ることはできない。

芥子園刻本『牡丹亭還魂記』について言えば、雍正年間の出版とされてきたが、⁸李漁が芥子園を売却した後の康熙四十二年（二七〇三）以後にまでさかのぼるとの見解もある。¹⁰

出版年代については検討を要するが、「芥子園発兌」と銘打つ『牡丹亭還魂記』は筑波大学本が初印本で、大阪大学・東北大学本は後印本であることが明らかである。更に筑波大学本は、中国国家図書館の清刻袖珍本を底本として上梓されたのである。尚、清刻袖珍本にも異版が存する。これについては、別稿で明らかにしたい。

¹ 『呉山三婦合評牡丹亭還魂記』底本探析（鄭培凱・趙天為主編『文苑奇葩湯顯祖・中国戯曲芸術研討会論文集（二〇〇九）』、一四八頁―一六八頁、広西師範大学出版社、二〇二二年九月）。

² 本稿では最初期に刊刻された台湾国家図書館蔵「石林居士序刻本」を用いる。

³ 本稿では天理図書館蔵本を用いる。

⁴ 国家図書館出版社編『国家図書館蔵牡丹亭珍本叢刊』第十五・十六冊（国家図書館出版社、二〇一八年）。

⁵ 或問、「坊刻『牡丹亭』本、……『淮警』『禦准』二折、有『箭坊』『鎖城』二譚、何此本独無也？」曰、「……至以『賤房』為『箭坊』、及『外面鎖住李全、裏面鎖住下官』諸語、皆了無意致、宜其并從妄杵也。」

⁶ 無論金陵別業屬之他人、即生平著述之梨棗、与所服之衣、妻妾兒女頭上之簪耳辺之珥、凡值數錢一鏹者、無不以之代子錢、始能挈家而出。

⁷ 今忽忽歷廿余稔、翁既溘逝、芥子園業三易主、而是篇遐邇爭購如故。

⁸ 王清原・牟仁隆・韓錫鐸編纂『小説書坊録』（北京図書館出版社、二〇〇二年）二十八頁には、出版年代が明らかなものだけでも「雍正三年刻『繡像第五才子書水滸伝』七十五卷七十回。雍正十二年刻『第五才子書水滸伝』七十五卷。乾隆五十一年刻『西湖佳話古今遺蹟』十六卷。嘉慶二年刻『飛龍伝』六十回。道光八年刻『鏡花縁』一百回。道光十年刻『鏡花縁』二十卷一百回。道光十一年刻『緑牡丹全伝』八卷六十四回。道光十二年刻『鏡花縁』二十卷一百回。道光二十一年刻『鏡花縁』二十卷一百回。咸豊七年刻『三巧縁』四卷二十回。同治八年刻『新刻天寶図』十卷五十回」を列挙する。

⁹ 傅惜華『明代伝奇総目』（人民文学出版社、一九五九年）六十五頁。

¹⁰ 趙林平「清代前中期戯曲の商業出版略論」（『芸術探索』第三十三卷第二期、二〇一九年三月）一一九頁―一二〇頁の注6に、「標署芥子園而没有明確主人の戯曲刻本、今日可知有『芥子園絵像第六才子書』『范氏博山堂三種曲』『牡丹亭還魂記』『新鐫綴白裘合選』等幾種。『新鐫綴白裘合選』明確可知在康熙二十七年（一六八八年）、『第六才子書』の刊梓時間在嘉慶年間、『牡丹亭還魂記』則至少在康熙四十二年（一七〇三年）以後（這幾種的年代判断如若要詳説、則需要一定篇幅、此处從略）、都是在李漁売掉芥子園之後、因此和前述『芥子園』不同。」とある。